

曾於文藝

うたごよみ

俳句

末吉俳句会

絵手紙のまた一人増え濃あぢさる

児玉 典子

一搔きに水輪のダンスあめんぼう

古藤 まゆ美

梅雨晴間見知らぬ鳥の来て啼きぬ

下大田 正子

大陽俳句会

一風に実梅の落つる音しかと

逆瀬川 節子

甲板に出でて五月の風まどふ

岩重 みどり

一村の音なく暮るる菜たね梅雨

大川 満

教え子の白百合手向く夫の墓

福村 よう子

短歌

末吉短歌会

千年を経しとふ楠のはざまより

透きとほりたる初夏の空

草野 ミツ子

題字

末吉文化協会会員 瀬戸口 淳民氏

新燃の灰にくぐもる新緑の
試行錯誤の日々を模索す

平田 美穂子

五月雨のしやらしやらそそぐ暗き夜は
耳そばだてて青葉梟待つ

泊 康

大陽短歌会

「人類の力では制御できません」
かの日のキュリー夫人の言えり

広川 ミドリ

木もれ陽に触れるがごとく手を伸ばす
車窓を初夏の風すぎてゆく

川辺 玉枝

ビーバーの音たくましく変わりゆく
息子の腕の上がりしならん

川辺 敦子

財部短歌会

いもうとを子と間違われ言いわけに
暮らしのせいとぼやき納得

永岡 冴子

春は花夏はそよ風秋夕日
季は行けどもわたしはあなたよ

脇丸 洋子

卒寿過ぎみすずの詩歌に涙する
われは異情かわれはわらべか

橋口 貞男

薩摩狂句

にがごい会末吉支部

呆やし亭主 女房ん雷れ
落て通えつ

鈴木 一泉

大雷 ピカッタンで
爺あけ座つ

古川 一幹

雷が 臍を見かけつ
光つ落

浜田 一好

雷や 爺ん軒つと
良か勝負じや

桐野 奈世

大陽薩摩狂句会

初孫ん 大か産声へ
安堵しつ

神宮司 素水

長げかった 返済が済ん
安堵ちしつ

西山 美代子

養生が済ん 我が家ん匂い
安堵しつ

境 すやすや

美人じやつち 冗談で言たや
売れた洋服

福元 多喜子